

聞くだけで、見るだけで、信じ込む

——オセロの意味論的な認識過程——

橋 本 侃

「誠実で信頼に足りる」イヤーゴによってたばかられているとは最後の最後まで気づかず、いとも簡単に嫉妬にかられ、オセロの心は乱れ、気は激し、目がくらみ、ついには文字どおり意識まで失ってしまう。そして、ことの善悪の区別ができずに、ムーア人の一部族と替えられぬほどにも貴重な一粒の真珠を、愚かにも自らの手で投げ捨ててしまった。ことをあまりにも知らずにいたために、ことがあまりにも見えなかったから余計に、さらには、ものをあまりにも考えぬ性向であったせいで、自らの手で愛する者の息の根を止めてしまった。なぜ、オセロには真相が見えなかったのだろうか。なぜ、聞いたことが嘘であるかもしれないとオセロは思いつかなかったのか、なぜ、すべてが事実でないかもしれないという可能性にまで考えが及ばなかったのでしょうか。それはオセロの認識過程に問題があったからなのである。

この小論では、三幕三場のいわゆる「誘惑の場」を中心に、オセロの言動の悲劇に至る動機づけに焦点を合わせ、オセロのものの捉え方を見てゆきながら、イヤーゴが張り巡らした話術のワナにいとも簡単にオセロが捕らえられてゆく様子に注目したい。さらに、この場面には、もちろん他の場面でも心象として重要な役割を果たしているのだが、オセロとイヤーゴの二人の対話に出てくる「……と思う、……と考える、……を知る、……と信じる」などという一連の認識表現が、「……を見る」という表現とともに頻繁に使われている。この表現群を一般意味論的な立場から踏まえた上で、¹⁾オセロが持つ認識傾向に注意を向け、イヤーゴの言葉遣いの巧みさに捕らわれてしまったオセロが、物事の輪郭さえもはっきりと見分けることができず、ものの判断が付かず、ついには分別を失い、貴重な愛を自らの手で抹殺してしまう次第を見てゆきたい。

小論の構成は、まず、イヤーゴが言葉巧みにオセロをそそのかし、つい

にはデズデモーナを殺す決断を下させてしまう三幕三場を中核として取り上げ、オセロがデズデモーナ殺しを心に決めていく過程を捉え、次に、その決意に至るまでのオセロのためらいと、イヤーゴの果敢なそそのかしを追い、最後に、デズデモーナを手にかけてしまうまで、デズデモーナの不実を信じ込んでいた人間オセロの悲劇的な感じ方、考え方、さらには、生き方を検討する仕組みになっている。

それでは先ず、三幕三場の「誘惑の場」を中核にして、どのような過程を経てオセロが一つの悲劇的な認識、つまり、デズデモーナが不貞を働いたという結論に至っていくのかを見てみよう。耳で聞いたことと目で見たことが、いかに事実として認識され、いかに一つの強迫観念として心の奥に定着していったのだろうか。事の真相が明らかになるまで、オセロは疑いに苦しみさいなまれていく。そこで、事の真相が明らかになる終幕へ一足飛びに目を向けてみたい。

最後の最後にオセロが得た、デズデモーナが身を汚すことはなかったという認識は痛ましくも遅すぎた。デズデモーナは確かに貞淑であり、キャシオーは潔白であった。イヤーゴが陥れようと計った二人の美德はいやが上にもオセロの目の前で輝いている。そして、事の真相が判ったオセロは、りっぱな武人としてキャシオーの弁明を潔く受け入れる。イヤーゴが悟る己の敗北の時は、善人にとってあまりに遅すぎた。イヤーゴは、これを最後に沈黙する。オセロをたばかった、その口を閉ざす以外の道はイヤーゴに残されていない。言葉の魔術師は言葉を失い、二度とその詭弁を弄することもなく、当然の報いとして、拷問台へと引かれてゆく。

- キャシオー 親愛なる将軍、わたしは一度として
閣下に疑われるような事はしておりません。
- オセロ そうだと確信しておる。そなたに許しを乞いたい。
お願いだ、あの小悪魔を尋問してくれ――
わしの身も心も全部、これほどまでのワナに掛けた理由を。
- イヤーゴ なにかを言わせようと、せがまいでくれ、
皆さんが知っていることは、知っていることだからな。
これからは一言もしゃべるつもりはない。(5.2.296-301)²⁾

小悪魔は退けられ、ワナに掛けられた理由をオセロが知ることはない。残された善人たちの悲劇は痛ましい。イヤーゴは「誠実で信頼に足るイヤーゴ」を演じきり、手前勝手な猜疑心から、他人の言葉や行いをすなおに理解せず、妬み疑って、言葉を武器に思いのままに他人を踊らせ、ついには善人たちを破滅させてしまった。そのイヤーゴから吹き込まれた言葉を、オセロはそのまま信じてしまった。あまりに見事に、あまりに巧妙に繰り出された毒蜘蛛の巣はオセロの「身も心も全部」がんにがらめにしてしまったのだ。

それというのも、オセロがいとも簡単に小悪魔の巣に捕らえられたのは、すべてはオセロのものの見方に問題があった。受け取り方に原因があった。イヤーゴの繰り出す手練手管は、オセロの思考と認識過程を熟知した話術にあった。オセロの心を思うように捕らえ、その鼻面を掴まえ、愚鈍の口バ同然に引きずり回した誘導質問の波状攻撃にあった。オセロは本能的にイヤーゴの言葉をいぶかしいと思うことは思った。イヤーゴの発する問い掛けは心に何かの屈託でもあるかのように聞こえてくるのは確かだったからだ。だから、それを突き止めなくてはならない、と思った。なにせ相手は信頼に足りるイヤーゴのことだから誠実に打ち明けてくれるはずだ。胸に一物などあるはずのない正直者イヤーゴのことだから、隠さずに全部話してくれるはずだ。

デズデモナーのもとから、まるで逃げるように去ったキャシオーの後ろ姿を見させておいて、イヤーゴはオセロに向かって、いぶかしげにつぶやく。あれがキャシオーなら、なぜ「こそこそと、やましそうに逃げ出し」たのか。そこが「気に入らぬ」と、オセロの耳に届くか届かぬぐらいの小さな声で言う。そして、ここに「誘惑の場」が始まる。

イヤーゴ ははあ、あれは気に入らぬ。

オセロ　なんと言った？

イヤーゴ 何も言いません、閣下。ただ、もしかしたら、の話です。
——いえ、なにも知りません。

オセロ 妻から離れていったのはキャシオ——でなかったか？

イヤーゴ　キャシオーですって、閣下？　——いいえ、考えられません、
そんなことはありませんでしょう、
あの方があのようにこそこそと、

やましそうに逃げ出すなんて——
お姿が見えたからといって。

オセロ あの方だった、とわしは確信しておる。 (3.3.34-40)

この二人のやりとりで注目したいのは、二人の台詞にある「知りません」、「考えられません」、「確信しておる」という表現である。なぜなら、「……と思う、……と考える、……を知る、……と信じる」などという一連の表現が、「……を見る」という表現とともに、この場面に頻繁に使われているからである。人はものを見て、何かであると知り、何かを心の中で思い、何かを頭の中で考え、何かであると信じ、やがて得心がゆくのが普通だからである。この思考過程を経て、我々は一つの認識に至るのが普通なのである。³⁾

ところが、オセロには、ものを見て、ものを聞いて、直ぐに信じる性向がある。あまりにも直観的に判断する態度が明らかなのである。頭を使って考えて結論に至るまでの過程がオセロには特徴的に、また悲劇的に、欠落している。状況判断を一步間違えば、結果は取り返しの付かぬことになることを戦場では何回でも経験的に知っているはずである。しかし、平時で人と人とが個人的に交わる場合はどうか——そこに、イヤーゴはオセロの隙を見た。心を乱させる糸口は人の言葉を信じやすいオセロの人の善さを利用して引き出せばいい。

イヤーゴ あの方アは率直で、寛大な方だ。
だから、人を見れば正直だと思い込む——
単に外見がそう見えるだけなのに。
だから、いとも簡単に鼻つつらで引き回わせる、
まるでロバと同じだ。 (1.3.399-401)

オセロが「率直で、寛大な方」であることをイヤーゴは熟知している。そこが付け目なのだ。そこに付け込めばいい。なぜなら、表面は正直そうにふるまえば、率直に「正直だと思い込」んでしまうのだ。いったん真実と思い込んで、信じてしまったら、それは絶対に真実であり、永久に真実なのである。あれかこれかを見極めてから行動を起こそうとするハムレットやマクベスの心的態度はオセロにはない。主観的な見解が、いつの間に

か、客観的な事実となってしまうのだ。

ならば、イヤーゴとしては、耳に伝わるとおりに言葉を信じさせておけばいい。言葉の背後にある話し手の意思にまで考えが及ばないところにオセロの御しやすさがあった。ほんのわずかでもそそのかしてやれば、ほんの少しでも耳に明かしてやれば、ほんの少しの証拠でも目に見させてやれば、オセロは話し手の真意を疑わず、耳で聞いたこと、目で見たものを事実と確信してしまうはず、という読みがイヤーゴにあった。これがオセロの性格設定である。

それではここで、この性格設定を踏まえた上で、オセロの役柄を見てみよう。どのような人物として登場したのであろうか。まずなによりも、オセロは軍人であった。戦場にあつてこそ勇猛果敢な活躍ができる。今は平和時である。トルコ軍は撃退され、キプロス島には再び平穏な生活が始まっている。また、オセロは異国人であった。自国にあるのと違って、ヴェニス人の気心にも生活感覚にも慣れていない。ヴェニス大公と政府の高官たちを除いて他の人をほとんど知らない状態にある。さらには、ヴェニス人との個人的な付き合いはほとんどないと言ってよい。

そしてまた、生活基盤に培われたヴェニス人の発想と言語習慣にも不慣れであった。いやそれよりも、生まれながらに、ものを深く考えないタチであった。イヤーゴの言う「寛大さ」である。相手の言葉は文字どおりの意味でしか受け取らなかったし、真意など思いつかないし、まして判ろうとしなかった。軍人ならば命令は一兵卒に至るまで上官が発話したとおりに復唱され、実行されなくてはならない。それが軍隊の常道である。

さらにまた、中年になって初めて女性に慕われ、恋をし、この女性を他人の誰よりも好ましいと思うようになった矢先に求婚され、その女性を妻としたばかりである。それも、年齢や、民族や肌の色なども誰の目にも明らかに違うのに、⁴⁾ 自分は選ばれたという嬉しい自負の念があった。その恋愛の初めがそうであったように、積極的に自分の方から働き掛けたわけではない。だから、いとおしいとさっきまで思っていた女性の心が他の男へ向いたと判ると、本人の口から確かめる慎重さもなく、上官思いと信じる士官の言葉の方を信じ、愛していると思った相手の気まぐれの行動を突き放すかたちになってしまった。その愛情を受け入れた責任はあるものの、遂行し、永続させる義務はないという態度である。慕われたから愛したという身勝手さが明らかである。

確かに、オセロは異邦人であった。他郷にあって傭兵の将軍であった。戦場における寸時の判断が自軍の命運を左右することは経験で知っていた。直観が命を救うのだ。生まれも育ちも違う異国人の内にあって、軍人としての名誉と誇りを全うすることを、何にも増して、優先させなくてはならない。それがオセロの物心つく頃から体験的に課せられた責務であった。かくして、異境にあって、ものの考え方、感じ方に個人的な違和感を抱いたとしても、あながち当人の不徳なり不明を責めることはできない。そこがイヤーゴの付け目であった。

だから、イヤーゴのような海千山千のつわもので、世事にも精通している者にとっては、オセロはキャシオーと同じで、「机上の知識に基づいた学説を前線に当てはめ……実践なしのたわごとばかりが／奴の兵隊としての能力よ(1.1.20-23)」ということになる。配下の兵を命令で動かすことは指揮官としてはできて、自分の言葉で同気相和すまでに、同等の存在として、人の心を個人的に動かすことはなかった。友情も知らず、まして、女性に自ら進んで心を向けることもなかった、と思われる。

そのような朴念仁のオセロがデズデモーナの愛を勝ち得たのは、その境涯にたいする彼女の無垢の同情にあった。「わたくしが経験した数々の危険のゆえにわたくしを愛してくれました、／そこで、わたくしに同情してくれた、そういうあの人を愛しました(1.3.168-69)」というのが、オセロがヴェニス大公の前で公式に表明した二人の馴れ初めである。これまでの「数々の経験」を生き抜いた矜持があったからこそ、また、その結果としての半生を賞賛されたのではなく、自分の外面的な容貌などに目を向けず、女性に特有の慈しみの心を持って同情してくれたからこそ心を動かされた、とオセロは言うのだ。

確かに、オセロのそれまでの人生は名家の子女には不思議な夢物語であった。現実味の薄いおとぎ話の世界に属している英雄がオセロの存在であった。しかも、贈られたハンカチを「始終身近に持っていて、それにキスしたり、／話し掛けたりして(3.3.299-300)」いるような童女そのままの純真さがデズデモーナにはあった。この純心さと「不潔な悪徳」との結びつきに違和感を抱かなかったオセロに人間観察の痛ましい不徹底さを見る。

一方のイヤーゴは、現実的な生き方を善しとしていた。イヤーゴにとっては、オセロとデズデモーナの結婚は腑に落ちぬものであった。二人の結びつきは彼の常識にないものだった。生まれ、育ち、年齢、そして容貌の、

どれ一つとっても解せぬことであった。人間本来のほのぼのとした愛情関係も愛欲以外のなにものでもない。だから、イヤーゴにかかれば、キャッシュオーと同様にオセロも「きれいな女房がいるせいでほとんど地獄落ち（1.1.20）」ということになる。愛の行為も、おぞましくも「背中二つの野獣の色ごと（同、115）」ということになる。他国の将軍を意のままに手繰るなど、赤子の手を捻るぐらいに簡単にやってのけられるのがイヤーゴである。生まれも育ちも、考え方も感じ方も違う異国の、いわば机上の理論家であるオセロとキャッシュオーを、世事の理論で攪乱させるなど朝めし前のことであった。

このように世間知らずの総督や前任将校⁵⁾などという目上の存在は、嫉妬深いイヤーゴ⁶⁾にとって、一事が万事うとましくてかなわない。これまた異邦人であるフィレンツェ人キャッシュオーは異邦人のムーア人オセロにとって覚えめでたい。イヤーゴという男にとっては女性が欲情の対象以外の何物でもないのだから、また、フィレンツェの男も中年のムーア人も色欲のかたまりであると伝え聞いているから、さもありなんという噂どおりに、女房を寝取ったに違いない。ならば、「目には目、歯には歯」の伝で、「妻には妻だ。奴と五分五分になるまでは、なにがどうあろうと／この心を絶対に満足させることは（2.1.296-97）」できないのだ。当然の報いを受けさせなければならない。遠く離れた故郷のヴェニスと違って、実戦がものを言うキプロス島という前線基地にいる今を逃しては副官イヤーゴが隊長になる好機はない。

それゆえ、デズデモーナの「美德を不潔な悪徳に変え、／生まれながらの人の善さを網にして／奴らみんなを一網打尽にしてくれよう（2.3.355-57）」と計るのである。イヤーゴの目は、オセロと同じようにデズデモーナの「生まれながらの人の善さ」こそ、付けいることのできる突破口なのだ。

それには、どう攻め込むか。対トルコの戦勝気分浮ついているのを幸い、酒に弱い隊長を酒乱に追い込む作戦に出た。手なずけた阿呆たれのロドリーゴを焚きつけ、キャッシュオーに喧嘩を売らせた。前後の見境のなくなったキャッシュオーは、思惑どおり、オセロの前任者で前のキプロス島総督のモンターノーにさえ切り付けた。そしてとどのつまり、オセロの激怒を買い、キャッシュオーは謹慎処分に追い込まれてしまった。この機を逃さずイヤーゴは、デズデモーナを介しての名誉回復を、お為ごかしにキャッシュオーに勧めた。こうして、デズデモーナとキャッシュオーの仲をオセロにほのめかすこと

から、イヤーゴの「実戦」は始まった。すべては結果をごろうじろ、とばかり小悪魔イヤーゴはほくそ笑む。

そのイヤーゴの射た最初の矢が、前述した「あれは気に入らぬ」という言葉である。デズデモーナは素直であったので、さっきまで傍らにいた者が不興を買ったキャシオーであることを隠さなかった。だから、イヤーゴの虚をてらった、ほのめかしは先ずもって失敗に終わってしまう。しかし、デズデモーナとエミーリアが退場し、オセロと二人だけになると、イヤーゴは思考の要になる短い言葉を次々とぶつけてゆく。誘導作戦の始まりである。そうすることで、初めはそれとなく、次第に強い疑念をオセロの心に染み込ませていく。それではいよいよ、イヤーゴの言葉遣いの巧みさを追っていこう。

イヤーゴ マイケル・キャシオーは閣下が奥様に求婚された時、
閣下が愛されていたことを知っていたのでしょうか？

オセロ 知っていた、初めから終わりまで。
なぜ聞くのだ？

イヤーゴ いや、ただ、わたし自身の考えに納得をゆかせたいだけです。
それ以外に意図はございません。 (3.3.94-98)

「それ以外に意図」がないと言われてしまえば、普通の話題ならオセロは不審に思うこともなかっただろうが、ことデズデモーナに求婚した時のことが話題にのったのである。「知っていた」とオセロが認めると、キャシオーが「奥様を知っているとは思わなかった（同、99）」とイヤーゴは応える。たびたび二人の仲立ちをしてくれたと言うと、イヤーゴの誘導作戦は軌道に乗る。

イヤーゴ 本当ですか！

オセロ 「本当ですか」だと？ そのとおりだ。
そこに見分ける何かがあるのか？
あの男は誠実ではないのか？

イヤーゴ 「誠実」ですか？

オセロ 「ですか」だと？ そうだ、「誠実」だ。

イヤーゴ 閣下、わたくしが存じております限りにおいては、そうです。

オセロ どう思うのだ？

イヤーゴ 「思う」ですか？

オセロ 「『思う』ですか」だと！ 確かに、こいつは
わしの言うことを山彦のように返してくる。
まるでこいつの考えの中に化け物でもいるようだ——
恐ろしくすぎて人に見せられないような何かが。

（同、101-111）

ついに小悪魔イヤーゴは相手の言ったことをいぶかしげに聞き返すことで、「思う」という言葉の呪文でオセロを翻弄させることに成功した。何か恐ろしい考えをしまいこんだような表情のイヤーゴを見て、その不気味さにオセロは恐怖を覚えた。オセロには相手の言葉の意味が瞬時に判らないと本能的におびえるところがある。それを察知したイヤーゴはオセロの知りたいという願いを巧みに引き寄せて誘導を続ける。もちろんイヤーゴの「考えの中に……化け物」がうごめき始めたのは確かである。

オセロ もしこのわしを愛してくれているなら、
お前の考えを明かしてくれ。

イヤーゴ 閣下、わたくしが閣下を愛していることはご存じです。

オセロ わしもそうだと思っている。

そして、お前はわしへの愛と誠実の心でいっぱいであり、
ものを言う時はまず言葉を

慎重に吟味するということを知っている。（同、119-23）

「考えを明か」さないイヤーゴからは、「わたくしが閣下を愛していることはご存じです」と答えをはぐらかされるが、それでもオセロは「そうだと思っている」と慎重に応じている。しかし、イヤーゴが自分より慎重に言葉を選ぶことや、オセロへの愛、つまり軍人としての上官への忠実さと誠実さは「知っている」と断言している。オセロは続けて、イヤーゴが部下としての忠実さと人間としての誠実さも認めたいと、その程度の自信ならイヤーゴが挫くことはたやすいとも知らず、自分にも人を見る目があるとオセロは鼻をうごめかす。キャシオーについて何か言いたげなイヤーゴに向かってオセロは言う。

オセロ

おい、どうしてそんなことを言うのか？

このわしが、この先、嫉妬に生きるとでも考えておるのか？

満ち欠ける月の変化を常に新しい疑惑を持って

追い続けるとでも言うのか？

(同、 179-82)

「満ち欠ける月の変化を…追い続ける」とはムーア人オセロに特有の異邦人を思わせる発想だが、「新しい疑惑を持」つのが月単位であるのが「びくついている」心境を窺わせる。毎日とも、半日とも、毎時間とも、更には刻々とまでは言えないでいるオセロに、考えの整理がついていない皮肉な控え目さが感じとれる。しかし、オセロは繰り返されるイヤーゴのけがらわしい推測に抵抗し、性格の潔癖さをあらわにし、人間を辞めて好色の山羊になるとまで言い放つ。山羊になるなど、どう考えても不可能なことだからだという控え目さが感じとれるのである。しかし、山羊でなく「化け物」になるのも時間の問題である。

オセロ

いいや、一度疑いを持ったら、

一度に決めてしまうということだ。

わしを山羊に変えてしまえ——

わしの魂の働きを、そんな脹らみに脹らませ、

ありそうにもない憶測に向けるような時には。

これでは、お前の想像に合わせるようなものだ。

わしは嫉妬なぞ起こさんぞ……

(同、 182-86)

なぜ、「一度疑いを持ったら、／一度に決めてしまう」のだろう。なぜ、疑う対象の本質を見極めることをしなくていいのか。ハムレットやマクベスがしたように、「AかAでないのか」という二分法的疑問に捕らわれることなく、「一度に決めてしまう」ところにオセロの悲劇的な思考過程がある。⁷⁾ オセロの思考の流れにある、このように重要な欠落の本流を更に追ってみよう。

これまでのところは、イヤーゴから思考の雛形を押しつけられ、自己防御に忙しいオセロの反応の一端が窺えるのだが、そこにはオセロを追い込むイヤーゴに一矢を報いなくてはならないと必死に考えるオセロの健気さも窺える。そこで、オセロはデズデモーナの父親に投げつけられた自他と

もに認める負の要素である、生まれ、育ち、そして容貌のすべてに言及し、自分が選ばれた事実を再確認しながら、しかも、その自画自賛からすると矛盾する愛の訣別を宣言する。

オセロ わし自身に弱い面があったとしても、
 あれの翻意など少しも恐れることも疑うことも
 するつもりはない。
 なぜなら、あれには目があり、このわしを選んだのだからだ。
 いいや、イヤーゴ、わしは疑う先に、見る。疑えば、立証し、
 それを証拠として、こうするより他はない——
 愛や嫉妬と直ぐに訣別するだけだ。 (同、 190-95)

オセロは「疑う先に、見る」と言う。見て、疑えば、即座に「愛を捨てる」と言う。デズデモーナにはオセロを「選んだ日があった」という。イヤーゴは言う、オセロの容貌におそれ、おびえおののいているように見えた時に、デズデモーナの愛が一番強かったのではないか、父親の反対を押し切ったのは、あの女の見せ掛けではなかったか、デズデモーナがいつも貞淑と考えつつ、この先も生きてゆくつもりなのか、目に見えるものが、実は見せ掛けであるということに考えが及ばないのか、と。しかし、相手をこのまま追い詰めては面白くない。「緑の日をした化け物」の「食べている獲物を／もてあそぶ(同、168-69)」面白さをもっともっと楽しませてもらわなくてはならない。

そこで、イヤーゴは悪意ではなく、為を思って口にした言葉だと繰り返し、一旦は攻撃の手を緩め、オセロの心にほっとする隙を用意させ、上司思いの愛情からの発言であると念を押していく。イヤーゴの話術のワナに掛かったオセロは、物事をよく見、ものを考え、ものの道理をわきまえて発言するイヤーゴを正直者であるとますます信じ込み、誠実で信頼に足りると確信し、とうとう己にないイヤーゴの賢さを認めるまでに至った。

オセロ さらに何か判ったら、もっと知らせてほしい。
 奥さんをよく観察するように仕向けてくれ。
 一人にしてくれ、イヤーゴ。

イヤーゴ 閣下、これでおいとまを。〔行きかける〕

だから苦しまなかった。
 次の夜もよく眠れたし、食欲もあったし、心楽しくもあった。
 あれの唇にはキャシオーの接吻の跡など見つからなかった。
 (同、341-44)

「邪淫の時の跡」が見えたら、不貞の跡があると考えたであろう、と情けないことを言う。そのような目に見える証拠などあるはずもない。「だから苦しまなかった」と正直にイヤーゴに報告している。その正直さという心の隙を率直にさらけ出してオセロは続ける。証拠が欲しい。目で確かめて、その後に疑う、とオセロは言う。疑う前に見たい——証拠が先だ。

オセロ そのとおりだとこの目に見せろ。それが駄目なら、
 そうだと証明してみろ、
 その証拠には、いささかの疑いをかけうる
 きっかけも隙もないということを——
 さもなくばお前の命はないものと思え！ (同、367-69)

目で見ないかぎり是不貞を信じることができない、と言う。しかし、見て疑うのでなく、見れば、もう疑うことをしない、とも言うのだ。「いささかの疑いをかけうる／きっかけも隙もない」ということは、「その後に疑う」と矛盾していることにオセロは気がつかない。これに対するイヤーゴの反応は、あまりにオセロを興奮させたことを目の当たりにして、さらにト手に出ることで——友情をオセロに抱き始めた矢先である、とまで言い放って、真意を隠すことに成功する。嘘など言わず、あくまで、為を思つての善意だと信じ込ませなくてはならない。敵の破滅を楽しむには善意と悪意の落差がない方がいい。

イヤーゴ 御教訓、まことにかたじけなく存じます。今日からは、
 友人を愛することはやめにします。
 友情がこんな不都合を産むのですから。
 オセロ いや待て、お前は誠実でなくてはならない。
 イヤーゴ いや、利口でなければならぬのです。
 誠実でいることは道化役だ、

懸命に演じて、元も子も無くしてしまうのですから。

オセロ

誓って言うが、

妻が貞淑であればと思うし、そうでないとも思う、

お前が正しいと思うし、そうでないとも思う。

証拠が要る。

(同、 382-89)

誠実さを演じ続けたばかりに誤解された、と言って、腹を立てて傍を離れるふりをするイヤーゴ。そのイヤーゴを引き止めてオセロは「思う」を連発する。そして、「知る」には証拠がいるのだという思考の筋道に沿う発想を続ける。思う壺に嵌まったオセロにイヤーゴはその「証拠の品」のハンカチで、デズデモーナを夢で抱き締めたキャシオーが「髭を拭いた(同、437-42)」と言う。デズデモーナが語り掛け、口づけを繰り返したハンカチで髭を拭いた! このあまりにも具体的で煽情的な報告に、ついに、オセロに事が見えた。疑いは立証され、愛とも嫉妬とも訣別の時が来た。

オセロ 奴の不貞が事実であることが、今こそ見えたぞ。

よく見ろ、イヤーゴ、

わしの愚かな愛のすべてを天に吹き飛ばしてくれるわ。

ほ一れ、これで胸のうからすっかりなくなってしまった。

黒い復讐よ、立ち上がれ、汝の虚ろな穴から…(同、447-50)

ついに、これまでデズデモーナに尽くしてきた「愚かな愛」の埋め合わせをするために「黒い復讐」を決意する。今やオセロはイヤーゴの誠実なものの言いに、一軍を率いるに足る隊長に任じた。ついにイヤーゴの求めていた出世が、向こうから転がり込んできた。

かくして、オセロはイヤーゴに教えてもらった思考過程を、最初は恐る恐る、最後には自ら進んで、真似てみることで、見事に誘導されたとも知らず、一步一步結論に急ぐことを強いられていく。ところが、見れば、考えるまでもなく、結論は明らかであるという生来のオセロの思い込みは、皮肉なことに、考えるという過程を無理じいされることで、更に強い疑念に追い込まれることになる。さらに皮肉なことには、考えを徹底させずに適当なところで切り上げるという悪習から結局は抜け出せず、真の意味での考えるという過程を経ずに、オセロは、いきなり結論へ飛んでしまうの

である。そんなことはないはず、と疑うことを止めて、復讐へすっ飛んでしまった。

こうして、固く決意したオセロは、密会を見たであろうとエミーリアに問い質し、「ハンカチを奴の手に見た (5.2.62)」以上、不貞は事実だとデズデモーナをも責め上げる。その手で愛する者を成敗したオセロは、事の成り行きについては、イヤーゴが正直者だから、「お前の亭主はなにもかにも知っている (同、137)」とエミーリアに言う。しかし、イヤーゴは「考えたままを言ったまでのこと。口にしたのは／ご自身でも信じられると判断されたことだけだ (同、172-73)」と言ってはばからない。「考えたまま」を聞かされてオセロが思うばかりか、考えて信じ込んでしまったのは、(それがイヤーゴのたばかりとも知らず)、考えの筋道を途中まで手伝わってもらった結果なのだという事にも気づかず、自分の考えを徹底させたものと信じて疑わなかったからである。

以上のように、三幕三場の「誘惑の場」を中心に、オセロの言動の動機づけに焦点を合わせ、オセロのものの捉え方を見てきた。イヤーゴが張り巡らした話術のワナにいと簡単にオセロは捕らえられた。もしも、ものを見る目と、聞き分ける耳がオセロにあって、じっくりものを考える人であったのなら、相手の言葉の背後に隠されている思惑を、次々と変化し、目まぐるしく展開する言語状況に身を置かされながらも、正しく推論できたであろう。瞬時に戦況を判断する将軍の目に加えて、刻々と変化する状況を熟考の後に、さらに捉え直す慎重さがあったのなら、見ることは信じることだ、聞くことも信じることだ、と一足飛びに己の直観を徹底させる悪癖から逃れることもできたであろう。

このように、イヤーゴにだまされていることに最後の最後までオセロは気づかず、いと簡単に嫉妬にかられ、オセロの心は乱れ、気は激し、ついには目がくらみ、貴重な愛を己の手で投げ捨ててしまった。あまりにもことを知らずにいたために、あまりにもことが見えなかったから余計に、さらには、ものを深く考えぬ性向であったせいで、自らの手で愛する者の息の根を止めてしまったのだ。

確かに、オセロには真相が見えなかった。聞いたことが嘘であるかもしれないとオセロは思わなかった。オセロの考えはすべてが事実でないかもしれないという可能性にまで及ばなかった。そのようなことはない、と考

えずに、そのようなことがある、と、皮肉にも、考えたのだ。

それは、「誘惑の場」でのオセロとイヤーゴの二人の台詞にもある「……を見る、……と思う、……と考える、……を知る、……と信じる」などという一連の認識表現に特徴的に現れたオセロの思考傾向に原因があった。確かに、オセロは聞くことから、あるいは、見ることから一気に確信に進む認識過程を得意としていた。

そこが、イヤーゴに付け入らせる隙を与えてしまった。言葉巧みにオセロをそそのかし、ついにはデズデモーナを殺すことを決意させ、イヤーゴは待望の部隊長に昇格した。オセロに率直で正直なためらいがあったにもかかわらず、イヤーゴの見事な誘導作戦にかかり、殺してしまうまでデズデモーナの不実を信じ込んだ人間オセロの悲劇的な感じ方、考え方、さらには、生き方を一般意味論の立場から検討した。

注

- (1) 翻訳論と一般意味論に関わるが、原文の ‘know, see, think’ などの認識表現とその派生語を日本語に訳出する場合に、それぞれの表す意味が重なるかどうかを踏まえた上でないと翻訳はできない。また、意味が重なる翻訳ができて、現代の日本人の語感でシェイクスピアが読めるかどうかという問題もある。400 年以上も時間的に隔たりがあるし、空間的にも掛け離れ、風俗習慣に始まって、ものの考え方、感じ方、さらには、発想も論理思考もなにもかにも相違するところの多い二つの文化を繋ぐことは初めから無理であるのは自明である。加えて、リズムを伝えることはほとんど不可能であると思われるが、原文の詩的映像をどのくらいまで削がずに翻訳で伝えられるかという問題もある。そこで引用者が取った翻訳姿勢を簡単に記しておきたい。

- ① まず、M.スピヴァックの『用語検索 (*The Harvard Concordance to Shakespeare*, 1969)』で認識表現の ‘know, see, think’ とその派生語だけに限って頻度を検索してみた。すると、三幕三場に比較的頻出していることが判った。しかも、オセロとイヤーゴの台詞に多出していることが確認できた。

- ② 次に、語釈の例文として『オセロ』から引用されている ‘know,

see, think'とその派生語だけに限って——ここでは煩瑣になるので、掲載されているそれぞれの語釈とその例文は省略するが——『オックスフォード英語辞典』と、C.T.アニアーズの『シェイクスピア用語辞典(*A Shakespeare Glossary*, Oxford, 1953)、第二版』と、その改訂版であるR.D.イーグルスンの『シェイクスピア用語辞典(1986)』を調べてみると、現代英語と違う語釈が少ないことが確認できた。つまり、認識表現に関して言えば、現代英語とシェイクスピアの英語は重なる部分が多いのである。

また、『コービルド英語辞典(*Collins Cobuild English Dictionary*, ed. John Sinclair et al, London: HarperCollins, 1995)』で 'know, see, think' とその派生語を調べ、いわば「意味の意味」を探ってみると、日本語の意味と重なる語釈が多いことが確認できた。この共通点は興味深い。人間の思考構造の当然の重なりなのであろうか。

加えて、「知る、見る、判る、考える、思う」を手近の国語辞典〔新明解国語辞典〕(第二版、三省堂、1974年)と『岩波国語辞典』(第五版、岩波書店、1994年)などと、『ことばの意味Ⅱ』(柴田武・國廣哲彌他編、平凡社、1979年)などの文献を参照し、英語と日本語との発想や語感の重なり具合や差異について確認した。〔なお、この場を借りて、後者の『ことばの意味Ⅱ』を紹介して下さった國廣哲彌教授に感謝したい。〕

この小論に引用した『オセロ』の翻訳について記すと、原文のほとんどが韻文であるむつかしさが先ずあるものだから、色々な翻訳姿勢を従来どおりとってみたが、「耳で聞いても分かりやすい、平易な散文体」に結局は落ち着いた。これはシェイクスピア劇の翻訳と現状を明らかにした「教室のシェイクスピア——教材としての翻訳 第一章 翻訳論に代えて——」(神奈川大学外国語研究センター『語学研究』第7号、59-82頁)で論述したのと同様の基本態度である。

- (2) 原典はE.A.J.ホグマン編註の「アーデン・シェイクスピア」叢書版(1997年)を使用した。また、引用文を翻訳する際には、既刊書を数多く参照したが、原文を比較的正確に訳出していると思われる大山俊一氏の訳(『旺文社文庫』、旺文社、1971年)を特に参照し、引用者が拙訳し

た。

- (3) 「思う・考える」についてだけ、『ことばの意味Ⅱ』（註(1)②参照）の記述を引用してみると、「共通点は「現在の状態」を表し（105頁）、<ある判断を表す>」。相違点としては、「オモウ<心の中で><ある対象のイメージ(感覚・情緒)を意識する><直覚的・情緒的>カンガエル<頭の中で><ある対象について知力を働かせる><過程的・論理的>（111頁）」とある。この知力を働かせる過程的・論理的な思考態度が確かにオセロには欠落していた。
- (4) 異邦人としてのオセロ像を論じた文献は多い。最近のものではデ＝スーサの著書(Geraldo U. de Sousa, *Shakespeare's Cross-Cultural Encounters*, London: Macmillan, 1999)がある。特に、第四章(‘Textual Intersections’)の113-28頁を参照。
- (5) イアーゴウの階級は「これまでの日本訳はほとんどすべて「旗手」と「副官」となっているが、これは誤りである。シェイクスピアの種本、軍隊の常識から考えて、イアーゴウが副官にあこがれるのはおかしい。副官は指揮官のいわば秘書、当番の類で、決して望ましい地位ではない。もともと副官と旗手とは同じ者である。副官が戦場に出れば旗手となったものである。キャッシオウはオセロウ麾下の「前任将校」、「副司令官」、「部隊長」、「隊長」などと訳すべきものである。イアーゴウが副官となってオセロウの秘書または当番となり、常にその周辺におり、自由にその家庭に出入りし、かくしてはじめて『オセロウ』の悲劇が可能となるのだ。」(大山、前掲訳書、「あとがき」、281 頁。)
- (6) 嫉妬にかられているのは、彼の置かれた状況や用いる心象を検討すれば、それはオセロでなくイヤーゴの方である。いわば、その代償行為をオセロに迫った、と解釈できる。例えば、イヤーゴにとってにがにがしいのは、自分と同国のヴェニス人で、色白のデズデモーナが黒いアフリカ馬に抱かれることであつた。「年寄りの黒の雄羊一頭が白の雌羊に乗って……背中二つのケダモノを演じて(1.1.87-115)」いるからだつた。イヤーゴの嫉妬心は淫らな想像を言葉にすることで一層かき立てられた。イヤーゴの台詞には性的な心象が溢れかえる。そして、イヤーゴが産み出すのは「緑の目をした化け物(3.3.168)」である。嫉妬は自分と同等であると考えている者が自分より恵まれていたり、優れて評価されていることが判った途端に産み出される。自分が嫉妬に狂っているのに、人

も嫉妬に狂わせようとする悪の化身は、人が善くて大まかなオセロの性格を手玉に取り、自分が緑の目をした嫉妬の化け物となって、オセロを自滅させたのである。

- (7) アリストテレスに始まる西洋的論理の「AかAでないか」という二分法については小論〔「よりいい」は「いい」より「いや」——比較構文に見るマクベスの選択肢——(『言語研究』第21号、神奈川大学外国語研究センター、1-27頁)を参照されたい。

Selected Bibliography

- Adamson, Jane. *Othello as Tragedy: Some Problems of Judgment and Feeling*. Cambridge University Press, 1980.
- Bayley, John. *Shakespeare and Tragedy*. London, 1981.
- Bradbrook, M.C. *Shakespeare: The Poet in His World*. London, 1978.
- Campbell, Lily B. *Shakespeare's Tragic Heroes*. London, 1961.
- Clemen, Wolfgang H. *The Development of Shakespeare's Imagery*. University Paperbacks. London, 1966.
- Council, Norman. *When Honour's at the Stake*. London, 1973.
- Curry, Walter Clyde. *Shakespeare's Philosophical Patterns*. Louisiana State University Press, 1968.
- Evans, B. Ifor. *The Language of Shakespeare's Plays*. University Paperbacks, 1965.
- Fiedler, Leslie A. *The Stranger in Shakespeare*. New York, 1972.
- Fluchere, Henri. *Shakespeare*, trans. Hamilton, Guy. London, 1964.
- Harbage, Alfred. *Shakespeare Without Words and Other Essays*. Harvard University Press, 1972.
- Henn, T.R. *The Living Image: Shakespearean Essays*. London, 1972.
- Hobson, Alan. *Full Circle: Shakespeare and Moral Development*. London, 1972.
- Holloway, John. *The Story of the Night*. London, 1961.

- Hulme, Hilda M. *Explorations in Shakespeare's Language: Some Problems of Word Meaning in the Dramatic Text*. London, 1963.
- Hunter, Robert G. *Shakespeare and the Mystery of God's Judgments*. The University of Georgia Press, 1976.
- Jones, Emrys. *Scenic Form in Shakespeare*. Oxford, 1971.
- Jorgensen, Paul A. *Redeeming Shakespeare's Words*. University of California Press, 1962.
- Leech, Clifford. *Shakespeare The Tragedies: A Collection of Critical Essays*. Chicago: The University of Chicago, 1965.
- Lewis, Wyndham. *The Lion and the Fox: The Role of the Hero in the Plays of Shakespeare*. University Paperbacks, 1966.
- Long Michael, *The Unnatural Scene: A Study in Shakespearean Tragedy*. London, 1976.
- MacAlindon T. *Shakespeare and Decorum*. London, 1973.
- Matthews, Honor. *Character and Symbol in Shakespeare's Plays*. New York, 1969.
- McClellan, Kenneth. *Whatever Happened to Shakespeare?* London, 1978.
- Muir, Kenneth. *Shakespeare's Tragic Sequence*. Liverpool University, 1979.
- Rabkink, Norman. *Shakespeare and the Common Understanding*. London, 1967.
- Rees, Joan. *Shakespeare and the Story: Aspects of Creation*. London, 1978.
- Rosenberg, Marvin. *The Masks of Othello*. University of Delaware Press, 1972.
- Stewart, J.I.M. *Character and Motive in Shakespeare*. London, 1965.
- Stoll, E.E. *Art and Artifice in Shakespeare*. University Paperbacks, 1963.
- Traversi, D.A. *An Approach to Shakespeare*, Vol. II. New York, 1969.
- Turner, Frederick. *Shakespeare and the Nature of Time*. Oxford, 1971.